明治三十年十二月二十四日第三種郵便物認可
昭和十九年五月二十七日印刷納本
昭和十九年六月一日發行（毎月一回一日發行）
第五百九十一號

一統

第四十九年六月 信樂號

發心の功德

爾の時に天帝釋、法慧菩薩に白して言く、佛子よ、菩薩初めて菩提の心を發こさば所得の功德其の量幾何ぞや。法慧菩薩言く、此の義甚深にして說き難く知り難く分別し難し、然りと雖も我れ當に佛の威神の力を承けて汝が爲に說くべし。

菩薩初めて阿耨多羅三藐三菩提の心を發こす功德善根は、能く其の際を知るを得る者有ること無し。佛の威力を承け即ち頌を說いて言さく、

世間を利せんが爲に大心を發こさば　其の心は昔く十方に徧せん
衆生を慈念して實捨する無く　諸の惱害を離れて昔く飾荘す
菩薩一たび最上心を發こさば　悉く能く往詣して皆嚴飾けん
佛の境界に於て信心を起し　佛の灌頂を得て心に著無く
兩足尊の所に願を報ぜんと念じ　心金剛の如く沮るべからず
妙道を志求して蔽惑を除き　法界に周行して勞を告げず
諸の分別を離れて心動ぜず　善く如來の境界を了り
三世の業網悉く已に除こり　如來の所に於て淨信を起し
信を以て不動智を成ずるを得　智清淨なるが故に解脫實なり
信心不動なること須彌の如く　普く群生功德の藏と作る
菩薩の發心功德の量は　億劫に稱揚すとも盡すべからず
過去未來及び現在　所有の劫數は邊量無し
此の諸の劫數は猶ほ知るべきも　發心の功德は能く測ること無し
菩提心は是れ十力の本　亦四辯無畏の本たり
十八不共も亦復然なり　皆發心より得ざるは莫し

—華嚴經—

力の宗教

本多日生

日蓮聖人の『乙御前鈔』の中に妙樂大師の言はれた事を引いて、

心の固きに假りて神の守り則ち強し

といふことを擧げられて居る。神樣の守護は何時もある譯だけれども、やはり本人の心が確かりしないといふと護る方の力も十分に現れて來ない、それには他の例を引くことはない、日蓮が良き手本である。大勢の者が憎んだけれども、日蓮は今日まで無事に來た。日蓮は一人であるけれども、心が強き信に神の守護も強くして今日に來た譯である。この事を皆が學んで心を確かりしなければいかぬ。ただ神樣に護つて貰ふとか、佛樣に護つて貰ふといふことの爲に己れの心が薄弱になつて、他力本願といふことではいけない、どこ迄も自分の心の力に依つてそこに守護が強く現れて來るのである。人間はいろいろの事を心得て居つても學んで居つても、心が確かりして居らなければいよいよの場合に役に立たない。『身强き人も心甲斐なければ多くの能も無用なり』で、身も壯健でありいろいろの知識技能を具へて居つても、心の弱い人であれば大事な場合に臨んでその活動が出來ないものである。だから心の力を强く養はなければならぬ。日蓮聖人の教の特に秀でて居るのはその點である。日蓮主義がその特色を發揮して居るのは、この信仰に來る者は本當に强い心の力を發揚することが出來る。力の宗教、力の文學と稱せられて居るものが日蓮主義である。それであるからあなた方も夫々いろいろの希望を有たれて居るであらうけれども、この信仰に入つた以上は心を確かりしてまごまごしないやうにして行かなければならぬ。

正師に親近せよ

次に『最蓮房鈔』に、

正師邪師善師惡師の不同ある事を知て、邪惡の師を遠離し、正善の師に親近すべきなり

といふことを仰せられて居る。お師匠樣を選ぶに就て惡い師匠を取つてはならない。ところが今日はなかなか良き師匠が少ないのであるから、決してくだらない情實や、いい加減な事に依つて師を選んではならない。師は針の如し弟子は絲の如しと言つて、針が良い工合に働いて行かなければ絲は眞直には行かないのである。裁縫の下手な人といふものは針の動き方が惡いから、絲の縫つて行つた跡がくねくね曲つて出來損つて行くのであつて、どんな立派な絲でも、銅絲の軟かな絲でも、針の使ひ方が惡ければ巧くは縫へない。師は針の如くで、人心の導きが良くなかつたならば役に立たないといふことに就て、正師邪師といふことを非常に力强く仰せられて居るのである。女の人は割合にさういふ事を輕く考へてしまつて、本當の良いお師匠樣も、ただ口先の上手な腹の黑い者も同じやうに考へて居る。どちらかと言へば或る婦人研究家が發表して居るやうに、女は口先で煽て上げるやうな事を言ふ者を非常に好くといふことがある。それは世間のつまらない事柄に就てはそれで宜いかも知れぬが、大事な信仰をさういふ邪智謟佞なる者の爲に謬るやうな事があつては實に慨嘆に堪へないことである。自分はこの正法正師の考よりして、我が統一團の傳道に就ても、近來正師邪師の觀念が自分の頭腦には强く動いて居るのである。それ故に自ら選んで過般十人ほどの純潔なる當俗青年の傳道の任に當る人を選んだのであるが、あなた方に於ても餘程その點を注意されなければならぬ。いい加減な事を言つて、信仰を致ゆるが如くにして正しき信念を動搖せしめ、害毒を流さんとする者がある。惡魔は最も判別し難き所に働くものである。或るお經を見るといふと、佛が多くの人を集めて說教を爲さつた時に、この聽衆の中に惡魔が居る、その惡魔を縛れ、と言はれた。ところがお弟子達は目連尊者も阿難尊者も、多くの聽衆の內から惡魔を發見することが出來なかつた。するとそこに離車童子といふその國の王樣の息子が來て居つて『此奴が惡魔です』と言つて一人の男を捕へた。見ると大勢が法を聞いて居るちようど眞中の所に、最も殊勝らしく法衣を着て居る坊さんが居つた。それが實は惡魔であつたといふことがお經に出て居る。左樣な譯であるから、この正師邪師といふことの判別に就ては、今後一層注意すべき時代になつて居るのである。それは即ち惡魔の活動として、我が統一團が正法正師の正しき傳道なるが故にさういふ妨害が起つたと自分は感じて居るのである。それは而も慨くべき事ではないのであつて、それあるが爲に自分等は一層精神を固め、又あなた方もそれに依つて最も力强き教化を受けることが出來るのである。惡魔の作用と雖もこれを轉用すれば、却つてお互ひの精神を引締めて行く信念增進の資料となる譯である。ただカカウカと何でもいい加減に聞いて居れば宜しいといふのではいけない、なかなか今日は間違つた者の多い時代である。それは法華經に於ても日蓮聖人の遺文に於ても吳々も注意されて居る事である。

尙ほその點に就て惡知識の恐るべき事を『顯謗法鈔』に示されて居る。それはどういふものが一番恐しいかといふ問を擧げて、その答に、普通言聞では女などに注意せよといふので、女に迷うてはいかぬといふやうな事が大きな問題のやうに考へられて居るけれども女はそんなに恐しいものではない、恐しいのは惡知識である。惡知識とは、教を傳へる方に於て間違つた事を教へる者である。その事をハツキリ書かれて居る。涅槃經を引かれて、涅槃經には菩薩は何も惡象などを恐れることはない、ただ惡知識を恐れなければならぬ。惡象は如何に暴れても人間の身を傷けるのみで魂をそこねはしない、惡知識は人の魂までも傷るものである。魂を傷ればそれに依つては三惡道に墮ちて心も身も傷けられる。惡象は一遍しか人を殺さぬけれども、惡知識は無量の身、無量の善心を破る。惡象の爲に殺され人は惡道に墮ちないけれども、惡知識の爲に迷はされては地獄、餓鬼、畜生道にも墮ちなければならぬ。と說かれて居る。この混樂經の經文を心して讀んで見ると、本當の信仰に志す者は一切の惡緣といふことを恐れなければならぬ。正しい信念や正しい心を亂さんとするところの、その惡緣といふものを斷切ることに注意しなければならぬが、その一切の惡緣よりは尙ほ惡知識を恐るべしと言はれる。すべての惡緣に依つて善心も惡心になるのである。どんな人でもいきなり惡人になるものではない、必ず緣を通して惡くなるのである。

すべての世の犯罪者を調べたならば、どういふ事からして惡事を犯す動機を造つたかと言へば、或は女房が虐待心が強かつたが爲に、それを滿足せしめようとしてやつたとか、或は自分が商賣上に於てそれだけの力が無くして、人並の生活が出來ないから遂に惡い事をしたとか、必ずその理由がある。その惡緣といふものが人をして罪惡を犯さしめるもので、その事無くして惡を爲す者は一人も無い。併しながらその一切の惡緣といふものは澤山人生に横つて居るけれども、その中に於て一番恐るべきものは惡知識であると言ふのである。

一切の惡緣を恐るべし、一切の惡緣よりは惡知識をおそるべしとみえたり

すべての惡緣の中に於て惡知識を警戒すべしといふことほど大事な事はない。佛教が今日のやうに墮落して居るのも、又日蓮門下の腐敗して居る現狀も、その意味から言へば導きを與へる良き師匠が乏しい爲である。普通に行きさへしたならばこんな事になるべきものではない。釋迦如來の御教はモットモット立派な效果を社會に擧げて行くべき結構な教なのであるけれども、それが事實に現れて居らないのは、そこに善知識ならざる者が多數あるが爲に新樣な事に相成つたのであると思ふ。

靈山にまゐりあはん

尙ほ日蓮聖人は『千日尼鈔』に、千日尼が佐渡ヶ島から毎年夫の阿佛房を使として身延山に、何物か土地の珍しい物などを贈つて日蓮聖人を慰められた。その千日尼の志に對してお讃めになつて居る話がある。

御身は佐渡の國にをはせども心は此國に來れり、佛に成る道も此の如し、我等は穢土に候へども心は靈山に住むべし、御面を見てはなにかせん、心こそ大切に候へ、いつかいつか釋迦佛のをはします靈山會上にまいりあひ候はん

女であるけれどもあなたのやうに法華經の有難いといふ志を捨てずして、それが爲に年々夫を使に寄されるといふことは、如何にも感じ入つた事である。天の月は遠い所にあるけれども、大地の池に影を泛べる。その通りにあなたは佐渡の國に居られるけれども、心はこの甲斐國身延に來られて居る譯である。佛に成る道もちようどそれと同じ事で、吾々の身は穢土に居つても最早や信念の光は靈山會上に住つて居るやうなものである。面りお顔を見たいといふことは、自分も思ふし、あなたも思ふであらうけれども、何も肉身の顔を見たからと言つて仕方がない、心が大事である。『釋迦牟尼佛の在します靈山會上にまいりあひ候はん』。お互ひの信ずる御佛のござる所に日蓮も歸るし、あなたもお出になるのであるから、そこで御眼にかかるならば本當の再會であると言はれる。斯ういふ意味合を能く味はつて、本當の精神的の確き信念を執つて、さうしてこの人生を看破つて行かなければならぬ。ただフワフワして居つては駄目である。人生は苦は苦と覺り、樂は樂とひらき、そこに信念の力に導かれたる生活をし、愈々人生の終りに達したならば決して泣き悲しむことはない、いつ何時人生の生死無常の嵐に出遭はぬとも言へない。併ながら法華經を信じ參らせた者は必ずや釋迦牟尼世尊のお在でなされる靈山淨土に詣でて、この上も無き結構なる果報を得るのであるから、その歡喜の心を強く有つて、現當二世所願成就と信心を賜んで行かれることを願む次第である。

捨我精進

小林一郎

立正安國に今度は『仁王經』の中に言つてある言葉を重ねて引いてあります。

仁王經に曰く、『國土亂れん時は先づ鬼神亂る。鬼神亂るるが故に萬民亂る。賊來りて國を劫し、百姓亡喪し、臣君・太子・王子・百官、共に是非を生ぜん、天地怪異し、二十八宿星道日月、時を失ひ、度を失ひ、多くの賊の起るあらん』。

國が亂れる時には鬼神が亂れる。『鬼神亂る』といふことはその國を守護する神樣の心が亂れるといふ事でありますが、要するに國が何となしに不安なやうな暗ッぽいやうな國になつて行くのであります。さうすると人間もやはり心が亂れて行くのであります。それは要するに教が行はれない結果である。教の行はれない國といふものはだんだん人間の氣分が險惡になつて行く。さういふ風に人間の氣分が險惡になつて自分の仕事に興味を持たない、自分の仕事に喜んで力を盡すといふ人間が少くなると、これに乘じて『賊來りて國を劫す』。餘所の國の者が攻めて來てその國を攻め取るといふやうな事を企てるやうになつて來る。さうして『百姓亡喪し』大勢の人間が皆仕事を失ふ。『臣君・太子・王子・百官、共に是非を生ぜん』君と家來との間に、又主人と召使の間に親と子の間にも是非を生ずる。『是非を生ずる』といふのは爭ひを生ずる。自分の方が善い、お前の方が間違つて居ると言つて責任の押付けッこをする。世間が險惡になると斯うなる。自分が惡かつたといふ人は無くなる。人に責任を押付ける。それで是非を生ずる。善い方は自分が善いのだ、惡い方は人に押付けてしまふ。一軒の家でもさうです。お互に咎め合ふやうになつたらその家はキット衰へて行く。なにか惡い事があると、お前の所爲だと言つて人に押付けてしまふ。盛んになつて來る家といふものはさうではなくして、皆が自分で責任を負うて人に責任を押付けないといふやうな氣分の人が多ければ家も榮えますし、國も榮える譯であります。これは越後の方に行つた時聞いた話で、通俗な話でありますが、私は面白いと思つた。越後の或る村に大變模範的の家がある。別になにも變つた事はないのだけれども、家中大層睦まじい。世間でも羨んで居る。或る人がそこの家に行つて居た。ところがその家は小さい農家であつて、亭主が農業を終つて家に歸つて來た。入口の戸をガタンと開けると、戸の上に釘があつてその釘に笠を懸けてあつたので、その笠が下に落ちた。さうしてそれが主人の背中に當つた。さうすると細君が出て來てお詫を言ふ。『どうも濟みませぬ。そんな所に笠を懸けて置いたからあなたに當つて……どうぞ勘辨して下さい』と言つて頻りに詫びて居る。さうすると主人が『俺の戸の開け方がチト亂暴だつた。普通に開ければ落ちはしないのだ、少し亂暴に開けたから落ちたのだ。俺が惡かつたのだ』と言つた。さうするとお婆さんが出て來て、『わしが先刻鍬の懸けるのを知つて居たのだから、その時言へば宜かつたのだが、年寄りがそこに氣が附かなかつたのがいけなかつた』と言つて三人とも詫びて居る。それで客に行つた人が、ハ

やアこれだナ、ここの家が詰まじいのは……誰か笊が落ちたといふ一つの事でも三人が責任を負うて『惡かつた』、『惡かつた』と言つて詫びて居る。これでは爭ひの起きようはない。成程どうもこの家が世間から淺まれるのも不思議はないと言つて感心したといふやうな話があります。これは小さい話でありますが、一事が萬事でありまして、なにか一つ惡い事があつた時に、お前の責任だ、といふ人が多かつたらその家は決してうまく行きはしない。皆が自分で詫つて自分の責任だとするといふ人が家を立つて居れば、その家はうまく行くに相違ない。これは國でも町でも村でも同じ事であります。今のやうに責任を人に轉嫁するといふやうな氣分を直さないといけない。議會などで喧嘩をするのも爭ひかも知れませぬ。これは政府の責任だ、イヤこれは前内閣から引繼いだので前内閣の責任だ、と言つて皆責任を逃れる。なにか善い事をやらうと思つても金がなければ出來ないのだ、金が無いのは國民全體の責任だといふ事になつて、何が何やら譯が分らなくなつてしまつて、皆自分で責任を負ふといふ考はない。惡い事は人に押付けて手柄は自分で取らうといふ考へ方では世の中といふものは決して能く行くものではないのであります。それで所謂『是非を生ずる』爭ひを生ずるといふ事は、善い事は自分が善いとする、惡い事は人が惡いのだとする。さうすると所謂險惡な世の中になりまして、人々が皆自分の立場ばかりを固執するといふ風になつて參るでありませう。それが國の亂れる本だと言ふのです。親子の間でもさういふやうな爭ひが起る。君臣の間でもさういふやうな爭ひが起る。さうするとどうもこの國は斯ういふ狀態では持たないから、天がこれを救める爲に天地のいろいろな災が起つて來る。星の運行が狂ふとか、日や月もいろいろな狂ひを生ずるとかいふやうな事になつて來る。それで人間の心が險惡になるからして賊の起る事もあるだらう。斯ういふやうな事が言つてある。

要するに國が一たび間違ひ始めると左樣に間違ひが多くなつて來る。その間違ひの多い隙間に乘じて外國が攻めて來るといふ事になると國が滅びることにもなる。これは詰り日蓮上人が、今の日本の人々が覺醒しないと他日他の國から攻めて來るやうにもなるといふ事を言はれたものでありますから、それで斯ういふいろいろな經典の言葉を引きましてこれを證據立てる譯であります。

それで國が協力一致してさへ居りますれば、樣ひ餘所からどんな壓迫が來てもその壓迫に耐へるぐらゐの事は出來るのでありますが、皆が責任を人に押付けるやうなそんな冷たい心持で居つたのでは、チョウトした壓迫にも耐へられるものではないのでありまして、私は西班牙といふ國があんなに亂れて居るのは少しも不思議はないと思ひました。汽車に乘つて西班牙を歩きました時に、百姓は王樣の惡口を言つて居る。私が西班牙を歩いた頃はまだ共和政治になりませぬで王政でありました。王樣があつたのですが、王樣はその時分西班牙に居ないで倫敦に行つて居りました。私が倫敦に行つた頃王樣は倫敦に居つたのです。それからマドリッドやその近邊を汽車に乘つて旅行しますと、西班牙の人が汽車に入つて來る。私は西班牙語を知らないから、私は西班牙の旅行は手眞似でもなんでもやらうと思つて覺悟して居た。すると英語の出來る人が出て來て英語で話し掛けた。『あなたは日本の方ですか』と言ふから、こつちは英語が能く出來ないけれども、英語なら相手になつてやれと思つて話した。別に話す材料もなかつたので、『この頃倫敦に行きましたらあなたの國の王樣が倫敦に來て居りました』と言ふと、その百姓は『アアあいつが倫敦に行つて居ますか』『あのフェロー（あいつ）が……』と言ふのです。これは恐ろしい。百姓が自分の國の王樣のことを『あいつ』と言ふのは恐ろしいと思つた。これはどうも變だと思つて『あなたの國の王樣は人氣が無いのですか』と聞くと『エエあいつはドンキーです』と言ふ。日本では馬と鹿で馬鹿になりますが、西洋ではドンキー、驢馬で馬鹿といふ意味になります。百姓が自分の天子樣のことをドンキーだと言ふのです。斯ういふ國は迚もうまく行きはしない。君臣の間がこんなバラバラになつて居て、百姓が自分の國の天子樣のことを馬鹿と言ふ恐ろしい國である。これでは迚もいけないと思つたのでありますが、實際その頃から始終内亂の絶え間がなくて、今でも西班牙はごたごたして居るのであります。内輪が一致しないで他の國の壓迫を受けるといふ事は當然の事であります。日本などは皇室御繁昌で殉に有難い事であります。併しお互の間に於てもモット協力一致の美風を養つて他の國の侮りを防ぐといふ事には十分に骨折らなければならぬ事と思ひます。餘所を歩いて見てさういふやうな事が實に目に附くのであります。

斯ういふやうな譯でありまして、それは根本を言ふと、大乘の佛教が行はれて所謂大慈悲の心持の人が多くなりさへすれば、皆が私の心持を樂にして參りますから必ず和合一致も出來る譯であります。この事を日蓮上人は言はうとお思ひになつて、先づ國に災難が起るといふ事を本にして人々が正しい信仰を崇まなければならぬといふ事にだんだん說を進められる譯であります。

日蓮世間の體を見て在一切經を勸ふるに、御所諸驗なく還りて凶惡を增長するの由、道理文證之を得了んぬ。終に止むことなく勘文一通を證り作して其名を立正安國論と號す。文應元年七月十六日戌時屋戸野入道に付して故最明寺入道殿に遥め申し了んぬ。此偏に國土の恩を報せんが爲也。

團費誌料維持費及寄附金感謝入帳

（自四月二十一日 至五月二十一日）

○二圓五十錢　東端榮吉殿○五圓　林長吉殿○五圓　森山太郎殿○五圓　日向勇殿○五圓　佐藤權右衛門殿○五拾圓　一本木覺太郎殿○貳圓　武圓廿錢　高橋大吉殿○二圓五十錢　竹村久殿○二圓廿錢　飯塚榊治殿○五圓　河瀬由子殿○參圓　荒木ツル殿○二圓廿錢　大八木義雄殿○二圓十錢　大濱伊太郎殿○十圓　松本日公殿○三十圓　森吉兵衛殿○二圓五十錢　小島裏一殿○五圓　金子光和殿○二圓五十錢　吉岡正太郎殿○五圓　田海ずる殿○二圓廿錢　大竹其平殿○二圓廿錢　櫻田藤三郎殿○二圓五十錢　勝鬘菩殿○三圓　字野博軍殿○二十圓　井上道太郎殿○二圓廿錢　伊東長次郎殿○二圓五十錢　古澤たみ殿○十圓　黑須源太郎殿○二圓五十錢　石上長作殿○二圓廿錢　古市二郎殿○二圓五十錢　和田千造殿○二圓五十錢　青柳勝三殿○十圓　井上道太郎殿

明治三十年十二月二十四日 第三種郵便物認可
昭和十九年五月二十七日 再録
昭和十九年六月一日印刷納本 昭和十九年七月一日発行（毎月一回一日発行）

一統

第四十九年七月 累德號

第五百九十二號

佛教六善事（邪先經）

彌離王、沙門邪先に問ふて言く、當に道は何等をか說くべきや。邪先の言く、王要言を聽かんと欲すれば、當に要言を說くべし。王の言く、翦實の道、何等をか最も善となすものぞ。邪先の言く、誠信・孝順・精進・念善・一心・智慧是を善事と爲す。王の言く、何等をか誠信と爲すものぞ。邪先の言く、（王）誠（諦）信とは人の疑を解き、佛有るを信じ、經法を信じ、比丘僧有るを信じ、羅漢道有るを信じ、今世有るを信じ、後世有るを信じ、父母に孝するを信じ、善を作さば善を得るを信じ、惡を作さば惡を得るを信じ、（虛無邪否定）有を信ず。是を以て後ち心便ち清淨にして五惡を去離す。何等の五ぞや。一には婬欲、二には瞋怒、三には睡眠、四には（放）逸（蕩）業、五には疑なり。人是の五惡を去らざれば心意定まらず、是の五惡を去らば心便ち清淨なり。譬へば蓮蓮越王の如し、車馬人從悉度して水をして渊惡ならしむ、過渡以去に王渴して水を得て飲まんと欲す。王に清水珠あり、水中に置くに水即ち清むを爲す。王便ち清水を得て之を飲まん。邪先の言く、人心に五惡有るは渊水の如し、佛の諸の弟子、生死の道を度脫し人心清淨なるは珠の水を清ますが如し、人諸惡を却け誠信清淨なるは明月珠の如し。

王復た邪先に問ふ。精進誠信とは云何。

邪先の言く、誠信を行ずれば便ち度世の道を得ん。譬へば山上の大雨の如し、其の水、下流廣大にして兩邊の人俱に水の淺深を知らず、見れて敢て前まず、若し遠方より人の來るあり、水を視て曉かに水の廣狹深淺を知り、自ら力勢を知り、能く水に入つて便ち渡度する者、弟子も是の如し、善心に精進して道を得るも是の如し。佛經に說いて言ふ、人に誠信の心有れば自ら得度すべし。世人能く自ら制止すれば五所（眼耳鼻舌身）の欲を却く、人自ら身の苦惱（四苦八苦）を知らば能く自ら度脫せん、人皆智慧（人身觀）を以て其の道德を成ず。

明治三十年十二月二十四日 第三種郵便物認可
昭和十九年五月二十七日 再録
昭和十九年六月一日印刷納本 昭和十九年六月一日発行（毎月一回一日発行）

第五百九十一號

本部關報

○今の時、教化の重任に携はるものは、益々人々に正しい宗教の信念を與へ、そこに大志願力を以てお國の爲盡瘁せしむべく誘導せねばならぬ。本部に於ては毎週の日曜と月曜の例會の外、八日の大詔奉戴記念日等に淸集を營んで、お互の道念を策勵してゐるが、四月三十日の日曜日は日蓮聖人建長の昔を偲んで、立教會を嚴修して後、井上男爵を圍んで立正安國の大義に就て數該時の過ぐるを忘れた。蓋く日沒に心付いて散會。

○先頃文相の『宗教に依る教化活動を强化促進する方策如何』の諮問案に對して、教界諸氏の意見を注意して居た處、ある宗教家の曰く『現在の宗教々理はすべて未來教であり、個人的であり、現世否定である。故にその本質が非國體的である』乃至『皇大神以外の本尊をたてて『日本人の信仰を他國他土に連れて行くやうな宗教は、戰時下のみならず平時と雖も、日本胃潰の邪教なりと云はざるを得ない。佛教の本質は決してかかるものではない。佛教は無我教であり、汎神教である。この教に本尊のあるべき筈がない』等。これは多分念佛門徒に對する痛棒とも見はれるが、佛教には無智、非常識、師子身中の蟲といふべき戲論である。けれ共多くの無宗教の人には何等かの示唆を促すものでないかと憂ふる。教家の身は其の一言一行に注意して聖具に基き正しい信仰、それは理智の上からも、道義の上からも、情操の點からも完備せる一乘の明教を知らしめて發心渴仰せしめることが極めて緊要事であると同時に、かかる教家の資格を制定さるべきであらう。實に『善知識は全梵行』の感を深くする。

○本團が淸廉潔白で終始一貫したことが、却て今日の外競貧弱の姿の統一誌となつたのは、世間でも道德に活きる者が一時寂寥を覺ゆるやうなものではあるまいかと思ふ。然るに宗教は量よりも質を尊重すべきであるから、たとへ數員であつてもその內容が卓越して居れば教化の使命は果されつつあるものではなからうか。意大な雜誌であつてもそれが能く世を濟ひ人を利し導いて居るか否は相當に考へさせられる問題と思ふ。『日蓮は廣略を捨てて肝要を好む』と。

○用紙の節約に伴つて今後は出來る限り道同布教といふことに就て地方の各位は須らく活用して戴きたいものである。勿論それは多數を集めることでなく、一家庭、一人であつても宜しい、眞に道を求めんとの志召あらば早速御申込み下さい。但し日時に就てのお約束は、交通の關係上出來まいから此點は豫めお諒承願つて置きます。而して該費とか謝禮とか御配慮は御無用です。唯その時の都合でお宿か食事をお願ひするかも知れませんが、一切家族的にして信仰增進を希ひたいのです。戰力增强も正信力より發る。『信は道の元』『一切の行は信を以て首と爲す』宗德の根本なり』矣。

統一 定價 一部 卷金二十錢 送料二錢
年ヶ年 金一圓二十錢 送料共
一ヶ年 金二圓二十錢

昭和十九年五月二十七日 印刷納本
昭和十九年六月一日 發行

東京都小石川區音羽六ノ十七
認證 編輯兼 磯部滿事
承3 發行人
合11 東京都四谷區內藤町一
版1 印刷人 山田英二
出は 日本出版配給株式會社
日雜 東京都小石川區音羽町八ノ十一
印刷所 野島好文堂印刷所 東東二〇五二
東京都神田區淡路町二丁目九番地
配給元 日本出版配給株式會社
東京都小石川區音羽町六ノ十七
發行所 財團法人 統一團 電話牛込五三三六番 振替東京九四二〇番
會員番號二二〇〇一〇〇號